

花園大学  
日本文学科

# 通信

第11号  
通巻39号

二〇一八（平成三〇）年六月七日発行  
編輯・発行 花園大学文学部日本文学科  
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八、一  
電話（〇七五）八一・五一八一（代）  
振替 〇一〇五〇・一・四三九九五

御挨拶

下野 健児

今年度も日本文学科の主任を務めさせていただいております。下野です。よろしくお願ひ申し上げます。

さて、今年度日本文学科は、新たに専任講師として、高橋啓太先生をお迎えいたしました。昨年度まで非常勤講師として三、四回生ゼミ（近現代文学）をご担当いただきありがとうございました。明里千草先生に替わり、近現代文学を担当していただいております。明里先生には、長らく本学科の運営にご協力いただきありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。お若い高橋先生に入っていたいただきましたので、本学科もようやく専任教員が橋本行洋（日本語学）、下野（書道）との三人体制になり、平均年齢が少し下がりました。また、特任教授として新聞水緒先生（中世）、曾根誠一先生（中古）には、引き続き講義、ゼミを精力的にご担当いただいております。

また、うれしいニュースとして、今年度日本文学科は定員五十名を越えて六十二名の新生を迎えることができました。入学式後の四月五日には、恒例の新生オリエンテーションを滋賀県で行いました。大学よりバスで出発し、石山寺参観をした後、ホテル会場で昼食。その後、学科説明、単位登録指導、新生の自己紹介などを行い、最後はミシガンに乗船し琵琶湖遊覧を楽しみました。あいにく小雨模様でしたが、新生同士の交流をはかる良い機会になりました。

近年は少子化の影響をうけ、本学も学生募集に関してきびしい状態が続いております。大学アピールのため、我々教員も授業以外にオープン・キャンパス、高校生対象の出張授業など、忙しい日々を過ごしております。受験生に来年度も今年度のように花園大学文学部日本文学科を選んでもらえるように、また、入学してくれた学生諸君には、「花大にきて良かった」「日本文学科選んでよかった」と思ってもらえるように、今後とも教員一同ご指導、ご鞭撻の程、願ひ申し上げます。  
(本学教授)

花園大学日本文学会 公開講演会  
(聴講無料)

日時 二〇一八年六月三〇日（土）  
午後一時三〇分～四時四〇分

会場 花園大学 自適館三〇〇教室

講演

戦後の戦争小説とその歴史性

花園大学 専任講師 高橋 啓太

源氏物語の政治と人間  
——光源氏を中心に——

元 慶應義塾大学 教授 田坂 憲二

着任のご挨拶

高橋 啓太

本年度四月に日本文学科に着任いたしました。高橋啓太と申します。前任地は福岡県の北九州市ですが、生まれも育ちも北海道です。専門は日本近代文学、特に戦後の戦争小説を研究対象としております。

京都は言うまでもなく古典文学ゆかりの地、という表現では軽すぎるほど古典文学と密接な関わりがありますが、近代文学との縁も深い都市です。例えば、梶井基次郎「檸檬」の主人公「私」が最後に立ち寄るのが京都の丸善（現在の店舗とは異なる場所にあったようですが）であることは有名な話です。三島由紀夫の『金閣寺』は言うまでもありません。また、法然院には谷崎潤一郎の墓があります。谷崎は日本橋出身の江戸っ子ですが、関東大

震災を機に関西（京都や神戸）に移住しました。『痴人の愛』『春琴抄』『細雪』などの代表作は、全て関西移住後に書かれています。

日本文学科では、三、四年生に対して演習を通して指導を行っております。前任校には人文学系の学部がなかったため、専門分野の本格的な指導は初めてです。毎回手探り状態で演習に臨んでいます。ただ、学生たちは意欲的です。特に四年生はすでにかなり明確な卒業論文テーマを持っており、頼もしさすら感じます。指導教員としてのプレッシャーを感しながらも、専門課程の学生と向き合う面白さ・楽しさも感じつつあります。

花園大学での新しい仕事にも京都の環境にもまだ慣れたとは言えませんが、諸先生方のご指導・ご助言を仰ぎながら、日本文学を盛り立てていきたいと思えます。何卒よろしくお願い申し上げます。（本学専任講師）



### 誤解か曲解か、それが問題だ

後藤裕也

本年度より、本学で「中国文学史」と「漢文学」の授業を担当することになった後藤裕也と申します。専門は中国の近世白話文学で、おもに『三国志演義』やモンゴル時代の芝居と歌を研究しています。このたび、本「通信」に寄稿する機会をいただきました。テーマは自由とのことですので、いつも中国語の授業で話していることをお伝えしたいと思えます。

それは、「若いうちはアジアに行け」です。これは私が学生時代に見た、ある航空会社のキャッチコピーで、実際に私も中国へ一年近く留学しました。留学中の夏休み、一ヶ月を費やして中国の各地（人混みが嫌いなので田舎ばかり）を旅行しました。ひとことでは言えませんが結果的には、生きるために一生懸命な人々を見る旅でした。いまもう一度行けと言われれば絶対に断わるような貧乏旅行でしたが、それもひとえに若さゆえ乗り越えられたのだと思います。その旅行を通して見聞きし、感じたことは、いまの私の考え方にも大きな影響を及ぼしています。やはり若いうちには柔軟な感受性があります。時間があります。そして何より体力があります。この時期に身をもってアジアを感じることは、きっと今後の自分の糧になると信じて疑いません。自分の考え方がしっかりと固まって（いわば大人

になって）からでは、アジアの魅力と効果は半減するような気がします。ぜひ皆さんも「若いうちはアジアに行け」って、人々の生きる力を肌で感じてみてください。

ここで唐突ですが、今回の寄稿を機にネット上で確かめました。実はこのキャッチコピー、正確には、「タイは、若いうちに行け」でした。本来はタイ限定だったものを、どうやら自分の経験を踏まえ、中国語の授業で学生に中国留学を勧めるために、都合よく変えていたようです。本当にインターネットって便利ですね。それはともかく、かの孔子さまも言っておられます。「過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ」と。この場を借りて訂正し、お詫びさせていただきます。

（本学非常勤講師）



## 私の大学時代

宮村 茉美

早いもので、花園大学を卒業してから1年が過ぎました。現在は、県内の高等学校で国語の臨時講師をしています。

書道を始めたきっかけは、小学生の時に習字教室に通い、高校生ときには書道部に所属し、今まで見たことのない見えていて楽しい書に触れ、書道の楽しさを知りました。大学で書道についてより深く学びたいと思い、書道コースに入學しました。書体別の書道実技、書道の歴史や理論などの様々な講義があり、4年間書道についてより深く学びました。入學した当時を振り返ってみると、書道のスタイルが変わり、戸惑いと不安の毎日でしたが、先生方には優しく丁寧にご指導いただき、先輩や同級生には沢山助けってもらったのを今でもよく覚えています。そして、書道部に所属し、作品を批評し合ったり、役員が中心となつて部員が一から展覧会をつくりあげたりと活動を行いました。私の代の役員は人数が少なく、一人で抱える仕事が多かつたので、とてもしんどい部分がありました。が、部員に助けられ展覧会をつくりあげた時の達成感は今でも忘れられません。書道部に所属していなかったら、このような何にも代えがたい経験はできなかったと思います。

4回生になると、卒業制作展に向けて同級生と励まし合いながら毎日を過ごしていた

記憶があります。何もかもが上手くいかず、壁にぶち当たったり、悩んだこともありましたが、そんな時は一緒に頑張ってきた同級生の存在はとても大きかったです。花園大学で過ごした4年間は、言葉では言い表すことのできない濃い思い出ができました。そして先生方・先輩・同級生・後輩に恵まれた大学生活でした。

今は、国語の臨時講師をしていて、部活動は書道部とハンドボール部の顧問をしています。2年目で、ある程度慣れてきましたが、毎日が勉強で色々な発見があります。書道部の指導では、大学時代に勉強したことを生かし、生徒に書の楽しさを感じてもらえるように日々指導し、これからも精一杯励んでいきたいと思っています。(二〇一六年度卒業生)

## 最近思うこと

曾根 誠一

特任になって、二年目になる。

教授会等の会議から解放されて、ゆつたりできると思いきや、長年担当してきた「基礎講読」を手放して、新たに「日本文学概論」を受け持ったから、昨年は、講義資料作りに苦労した。惚け防止のための御配慮(?)であったように思っている。

コピーした論文等の資料を読み込んで、まとめていったのだが、いろいろな気付きもあった。恥ずかしながら、『源氏物語』桐壺巻

巻頭の「女御更衣あまたさぶらひたまひける中に」の光源氏の母桐壺更衣の「更衣」は、村上帝の時代までは存在したが、冷泉帝以降消失し、紫式部が活動した一条帝の頃には、昔話となっていたことに、初めて気付いた。ある会で話したら、小生と同類の人もいた。勿論免罪符にはならず、不勉強を大いに恥じ入った次第である。

今般、所属する研究会として四冊目の共著となる『好忠百首全釈』を刊行し、長年関わった会が解散する(二冊目の『惠慶百首全釈』は参加せず)。北九州市の女子大学に勤務していた時、長崎の女子大学に赴任していた友人と、下関の女子大学に勤務しておられた森田兼吉先生にお願いして、『為頼集』の研究会を始めた。輪読を初めて一年足らずで、小生は不義理をして、花大に移った。それでも、可能な限り博多に通い、『為頼集全釈』の刊行までは関わった。三十年程前の話である。

筑紫平安文学会の同人は、長い時間の流れの中で、東京に移ったり、京都に移ったり、若干の出入りがあったりして、博多での定例会が、京都の御所を臨む研究室で開催されるようになった。「筑紫」は、今の実態にそぐわない、故地の名称となった。新規の同人を加えない方針でやって来たが、解散後は、装いも新たな研究会として生まれ変わり、始発するようで、老残の身には眩しすぎるように思われる。

残された時間には限りがあり、現在、科学研究費を得て調査している『竹取物語』の奈



良絵本・絵巻の研究を進めて、この数年でまとめ上げたかと思っている。人の活動には、時期があり、老兵になった今は、静かに去るための準備に取りかかるべき時に差し掛かっていることを、実感し始めている。

その手初めは、荊妻にいわれている研究室とマンシヨンの書籍の問題なのだが、さて、如何にしたものやらと、ビール片手に思いあぐねている。  
(本学特任教授)

### 京の玄関口どす

橋本行洋

日本文化の象徴的存在である京都は、現在、空前の観光ブームで、外国人も日本人も、老いも若きも、多くの人々で賑わっている。

繁華街の立ち食い蕎麦屋に入ると大抵は外国人観光客がいて、きつねうどんや天ぷらそばを注文し、写真に収めている。東洋人が箸を使うのには驚かないが、西洋人も多くは器用に箸を操って麺をすすっている。寿司をはじめとする日本食が世界中で認知され、普及していることを再確認する場面である。

牛丼屋に行くと、客の大半が中国人、ということがある。牛丼は今や中国全土で食されており、彼らは慣れない日本食に飽きたり、予算が厳しくなってくると、食べ慣れている牛丼で腹を落ち着かせる。本場の牛丼を、中国より安い値段(中国だと並盛りで五〇〇円くらい)で食べられるのはありがたい。

また、外国人観光客が「ありがとう」「すみません」「いくら?」などの日本語を上手に使う場面にもしばしば出くわす。時には「くはる」のような京都弁を使う人までいる。そんな京都の玄関とも言える京都駅近くに建つショッピングモール内の酒屋に、写真に示した掲示物があった。「京都限定の日本酒もあるどす」……。「どす」は「です」の交替形であるから、これは「京都限定の日本酒もあるです」と言っているのに等しい。つまり「どす」の上に来るのは名詞か、せいぜい形容詞で、「ある」のような動詞に「どす」が付くことはない。この台詞を書いたのは京都人どころか、関西人でもないと思いたいがあるいは京都語の方に変化が生じつつあるのだろうか? 気になってしかたがない。  
(本学教授)



『花園大学日本文学論究』第 10 号

・神亀二年難波行幸歌群の性質

小田 芳寿

・古本説話集 本文と注釈

— 上巻第六話

帥宮通和泉式部給事 —

新聞 水緒

・受贈図書目録

(二〇一六年一〇月〜二〇一七年九月)

◇入手希望の在学生は、共同研究室(日本文学・書道)まで申し出てください。

◇購読をご希望の方(卒業生・一般)は、花園大学日本文学科あてにご連絡ください。

### 編輯後記

◆今号は word で割り付けを行い、学内で印刷しました。前号と体裁が一部変わっているのはそのためです。印刷所に出した場合に比べると重厚さに欠けるところがありますが、何卒御寛恕ください。(は)

◆今回は現職教員の執筆が多い号になりましたが、卒業生の宮村さんと新任の専任・非常勤の先生方から若々しく新鮮な文章をいただきました。古参教員も負けずにごんばっております。(は)